
もうひとつの『なんでも屋』

サラダ味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もうひとつの『なんでも屋』

【Nコード】

N3033N

【作者名】

サラダ味

【あらすじ】

『なんでも屋』に登場した女性二人の事件前物語。

自切？

「子供は 時に残酷なものです。私にもそんな一面がありました」
間山泉は深く息を吐いた。

「近所の公園で遊んでいたときです。よく一緒に遊んでくれた男の子が、草むらから飛び出したカナヘビをみつけました」

そう、これくらいだったかしら、と泉は親指と人差し指で寸法を示した。

「私が怖がると、男の子は『平気だよ』と、カナヘビの尻尾を掴みました。男の子は怖がる私を面白がって、逆さまになったカナヘビを私の顔に近づけました。カナヘビは逃げようと必死に手足をバタつかせ、頭を左右に激しく振ってました。男の子が更にカナヘビを近づけたので、私は必死にその手を払いました」

泉は顔にかかる髪の毛を耳に掛けた。

「私の手が男の子のカナヘビを持つ手の手首あたりに当たると、カナヘビは大きくカラダを振られて、その勢いで飛んで行きました。私は男の子が手を放したのだと思いますが、男の子の手にはしっかりと尻尾が残っていました。尻尾の切れたカナヘビを目で追うと、草むらに一目散に逃げていきました。そのときはかわいそうなことをした と思いました。でも……」

泉は言葉を探す。

「男の子が言ったんです。『尻尾が切れても大丈夫だよ』って。男の子はそう言って、切れた尻尾を地面に落としました。私はそれを見て驚きました。切れた尻尾が動くなんで、そのときの私には想像もつかないことでした」

泉は視線を宙に彷徨わす。

「でも、男の子は、『面白いだろ』って笑ってました。私は どううしたと思います？ 尻尾が切れても大丈夫だと知り、安心して笑ったんです。尻尾のない不恰好な姿で逃げたカナヘビを思い出しな

がら、くねくねと動く尻尾を見て笑ったんです」

残酷ですよね、と泉は微笑んだ。

「後に、カナヘビのその行為は、生命を守るために備わった能力だと知りました。『自切^{じせつ}』というんですってね。ご存知でした？ 凄^{すごい}い能力ですよ。身を守るためにカラダの一部を切り離^{はな}すことができるなんて……」

泉は肩で大きく息をして一点を見つめた。

「私も尻尾を掴まれたカナヘビと同じだったんです。もちろん尻尾を掴んでいたのは夫です。だから、自分を夫から守るために切り離したんです。私の場合、尻尾は心でしたが」

泉は机の向かい側にすわる大羽刑事に、夫殺害について語りだした。

自切？

一年前。

葬儀場。

祭壇。

遺影には柔らかに微笑む夫の明の顔。

たくさんの弔問客が神妙な面持ちで、次々と喪服姿で泣き崩れる自分に慰めの言葉をかけてくれる。

泉は近頃、そんな妄想に耽るようになっていた。

明の死を願っているのかしら。

我に返って苦笑した。

結婚して三年。

泉は明の希望どおり結婚を機に仕事を辞めて専業主婦として毎日を過ごしていた。

明に不満はない。

一流大学を卒業して一流企業に入社した夫。若くしてマンションを購入できる収入もある。

友人たちも口を揃えて泉は幸せだよね、と言ってくれる。

泉もそう思う。どちらかといえば、自分のほうが妻として至らない部分が多い。

明は学生時代から一人暮らしをしており家事全般をそつなくこなしてきた。それだけに料理、洗濯、掃除に至るまで口を挟むことが多い。

それでも泉は明の言葉を不甲斐ない自分へのアドバイスだと受け入れることができた。

もっと内助の功としてがんばらなければ。

そう思っているはずなのに、ふとした瞬間に明が死んでしまう妄想に耽ってしまう。

なぜだろう？

不安なのかもしれない。

明がいなくなってしまうたら自分はどうなってしまうだろうか？
独りで生きていけるだろうか？

今の生活に満足すればするほど、明あつての自分だとの認識が強くなる。

私ってこんなにも弱い人間だったのね。

そう考えている泉の鼻に、魚の焦げる臭いが飛び込んできた。

いけないッ！ と慌ててグリルを開くと、サバの切り身が真っ黒になっていた。

また明に怒られる。泉は情けない思いで、煙と臭いを追い出そうと窓を開けた。沈みゆく夕日のオレンジの陽射しが差し込んできて、まな板の上の包丁がキラリと光った。

自切？

半年前。

泉は悲鳴をあげながら目を覚ました。

「泉ッ！」

顔を横に向けると、明が豆球の灯りのもと、眉間に皺を寄せて泉をみつめていた。

「ごめんなさい……」

「……ッたくびつくりさせるなよ」

明はカラダの向きを変え、泉に背を向けた。泉は申し訳ない気持ちで一杯になりながら、首元の汗を拭った。

嫌な夢だった。

泉は天井をぼんやりと眺めながら思い返す。

夢の中で泉は夜の公園を歩いていて。

突然、前方の桜の木の陰から男が現れ、泉に襲いかかってきた。助けて。

泉は懸命に逃げたが、男の足のほうが勝っていた。腕を掴まれると、足を掛けられ、抵抗する間もなく地面に転がされた。

嫌ッ。

泉は必死に逃げようとしたが、男は馬乗りになり、泉の両手首を押さえた。泉は激しく首を振って抵抗したが、男の力になす術もなかった。

「死にたくなければ静かにしろ」

男はポケットから小型の刃物を取り出し、泉の首元に刃先を当てて脅かした。刃物のひんやりとした感触が泉の身を更に縮ませた。

お願い、やめて。

懇願する泉を嘲笑うかのように男は口角を吊り上げて、刃物の背を首から顔に滑らせた。そしてポケットから布テープを取り出し、慣れた手つきで泉の口を塞ぐと、うつ伏せにし、後ろ手に両手首を

布テープで固め、再び仰向けにした。

「少しの我慢だ」

男はそう言つて、刃物を持つ手を泉のスカートの内側にゆっくりと忍ばせた。

泉は恐怖に身を震わせて全身を硬直させた。

その刹那、下腹部あたりに激しい痛みが走った。身を振じらせると、カラダが急に軽くなったような気がした。

すると、男が意味不明の言葉を口走りながら泉から後退った。男の手から離れた刃物が泉の顔面に向かって落下する。泉は咄嗟に身を回転させ、かろうじてそれを避けた。

その時、泉は我が身の異変に気づいた。泉には腰から下の感覚がまるでなかった。恐る恐る下半身に目をやると、信じられないことに腰から下の部分がなくなっていた。

そして少し離れた場所で上半身を失った下半身が、それがひとつの個体であるかのように、激しく足をバタつかせていた。

嫌ア~~~~ッ！

泉はもう一度首元の汗を拭った。

時計を見る。

午前五時半。

いつもより三十分程早い、泉はベッドを出て朝の準備に取り掛かった。

朝食の調理中、悪夢が頭から離れなかった。

豆腐を掌の上で切ると、指先に痛みが走った。

白い豆腐に向かって、赤い血が流れた。

泉は豆腐を三角コーナーに捨て、戸棚から薬箱を取り出しながら、包丁の怖さを改めて知った。

自切？

取調室。

「愛情は刹那的なものじゃないですか。愛するのも一瞬なら厭うのも一瞬」

泉は大羽刑事に夫殺害の動機を尋ねられ、抑揚のない口調で言った。

「何があつたんです？」

大羽刑事の問いに、泉は薄く笑みを浮かべた。

「ひとりで避けたんです。向かってくる車から私を守ることなく、ひとりで避けたんです」

犯行前日のことだった。

泉は明と一泊二日の温泉旅行に出掛けていた。

明は温泉好きで、年に数度は泉を誘っていた。

その日も温泉にのんびりと浸かり、日頃の疲れを癒し、浴衣姿で夕暮れの温泉街を肩を並べて歩いていた。

日常生活では小言の多い夫も、旅先では気分を損ねることなく優しい眼差しで泉に接してくれた。

泉は山間に沈みゆく夕日を眺めながら、幸せな気分浸っていた。蛇行する山道の先にある宿に戻る途中、一台の車が急カーブを下ってきた。

泉は明と道路端に寄り、縦に並んで足を進めた。

しかし、車は大きく膨らんでカーブを曲がり、泉たちはヘッドランプの眩い光に照らされた。

危ないッ！

泉は身の危険を感じたが、カラダが硬直して咄嗟に動けなかった。だが、目の端では信じ難い夫の行動をしっかりと捉えていた。

泉の前を歩いていた明は、接近する車から妻である泉を守る素振りもみせず、泉とは反対方向に飛び退いた。

次の瞬間、泉は巨大な光の輪に包まれた。泉は額に手を翳し、目を閉じて、わずかに身を捻った。

タイヤが激しく軋む音が耳に響き、浴衣の裾が勢いよく引つ張られた。一瞬、泉はよろめいたが、次の衝撃は伝わってこなかった。エンジン音が次第に泉の耳から離れていった。

助かった。

泉は減速することなく遠ざかってゆく車のテールランプを無言で眺めた。胸の鼓動は高鳴り、冷や汗がどっと噴き出して胸の谷間を流れた。

「泉ッ！ 大丈夫かア？」

明の声が薄闇に響いた。

「ッたくあの野郎ッ、ひでエ運転しやがって」
憤る夫の声。

その声に泉の心は湯気を立てて湧き出る温泉のように沸々と怒りがこみあげてきた。

「大丈夫……」

肩を抱き寄せた夫をよそに、泉の脳裏に温泉街で見かけた地元の名工が打った包丁が浮かんでいた。

自切？

犯行当日。

深夜。

宿。

泉の目は冴えていた。

温泉に浸かり、適度な疲労を得て熟睡する夫を横目に、バッグから密かに購入した包丁を取り出した。

夫にとって私は、自らの命を投げ出してまで守るべき価値ある存在ではなかった。逃げ出さなければ……。

泉は闇の中、包丁をじッと見つめ、心を肉体から切り離れた。

取調室。

「帰り道、交通量の少ない場所で、気分が悪くなったと言って車を止めてもらいました。林に分け入っていく私を、夫は心配そうに追ってきました」

「そんな明さんの姿をご覧になっても気持ちは揺れなかったのですか？」

「私はもう、夫を愛した心を切り離していましたから……。夫のどのような態度も、言葉も受け入れることはなかったでしょう」

「躊躇なく殺害したと？」

「生きるために……」

泉は力強く答えた。

「後悔はしてませんか？」

大羽刑事に見据えられた泉は、口元に笑みを浮かべてみせた。

「刑事さん、ご存知でしょ。自切したカナヘビの尻尾は再生するんですよ。もつとも、以前と全く同じ姿というわけにはいかないようですが……」

「あなたの心も同様に再生したと？」

「私の心に夫などもう存在していません。私は新しい一歩を踏み出したのです。少々苦難のスタートではありますがすけどね」
泉はそう言って足を高く組んだ。

『自切』<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033n/>

もうひとつの『なんでも屋』

2010年10月8日14時25分発行